（様式５）　　令和２年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	管Ｒ２Ｋ０８	氏　名	小林　義伸
研究主題 ー副主題ー	学び続ける教員像の実現に向けた教員の力量形成プロセスの研究 ー小学校体育研究会所属教員への半構造化インタビューを通してー		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	浅野　あい子
所属	新宿区立柏木小学校	所属長	竹村　郷

キーワード：教員の力量形成プロセス　教員の学び　教科等研究会　学びの場の拡大

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

教育基本法第９条、教育公務員特例法第 21 条、22 条には、教員は研究と修養に励むように示されており、その機会が保障されることも示されている。中央教育審議会初等中等教育分科会(2021)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」では教員の学びについて、固定化した知識・技能ではなく、教師としての資質・能力と共に社会の変化に対応できる知識・技能を継続して学んでいく必要があるとしている。

そこで、本研究は、学び続ける教員を育成するために、教科等研究会で学ぶ教員の力量形成プロセスを明らかにすることを目的とした。筆者は、区市町村立の小学校体育研究会を身近な学びの場として活用してきた。教員が自己成長のために、既存の学びの場を活用できることを願って、本研究に取り組んだ。

そのために、教員の学びについて先行研究を根拠に整理し、経験や役割を通した力量形成について、そこで学ぶ教員にインタビュー調査を実施し、結果を分析した。そして、教科等研究会への所属ならびに活動への参加を通して、小学校教員が学びの場を広げることについて考察した。

２　研究の方法

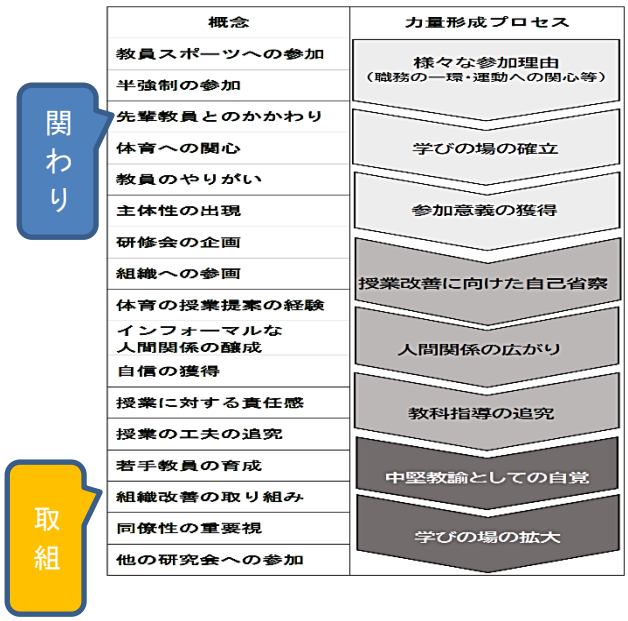
本研究では、まず、教員の力量形成場面について、先行研究を基に整理をした。次に、区市町村立小学校体育研究会に所属する教員に対して調査を行った。調査方法は、半構造化インタビューとし、主な質問項目は、「教科等研究会での学びや経験、担った役割について」、「教科等研究会への参加の目的や思いと、担った役割が発生したときの目的や思いについて」、「対象者の考える体育研究会の価値について」の三点である。調査時間はそれぞれの教員に対して約 40 分間、オンラインや対面で筆者と１対１で行った。その内容は、録音し逐語録としてまとめた。調査期間は、2020 年８月から 10 月に掛けてである。そのデータを基にして M-GTA 分析を行った。M-GTA 分析は、木下(2003)によると、「人間の行動や他者との相互作用によってなされる動き（変化・プロセス）の説明や予測に有効な理論生成を目指す質的研究方法」とされている。本研究の研究テーマである学び続ける教員育成は、様々な経験や他者との関わりの相互作用でなされる変化やプロセスを有して行われていくものである。M-GTA 分析は、インタビューの結果から複数の似通った具体例を同定し、それらの具体例を包括的に説明できる概念を生成することができる。そして、概念同士の関係性を考察して対象の意識や行動を構成するプロセスを結果図として示すことができる。このことから、どのような経験に基づいて教員の力量形成が行われているのかを分析するのに優れた手法であると考える。

３　研究の結果

国立教育政策研究所「優秀教員の力量形成に関わる質問紙調査」（平成 22 年２－３月）によると、教員の力量形成には、他の教員との出会いの場が必要としている。また、堀内(2018) は、教員の学びの場を広げる必要性を提唱している。これらの先行研究から、教員の力量形成には、教員たちが主体的に集まり、それぞれのキャリアの中で培ってきた知識やスキルを共有し、情報交換をして学び合うインフォーマルな機会としての他の教員との出会いの場が重要であるとし、その学びの場を広げていく必要があると整理した。

10 名の調査対象者から得られたインタビューデータを、学びや経験につながる文脈や自己の学びに対する想いに繋がる文脈に着目して分析した結果、17 の概念と八つの力量形成プロセスが生成された。表１は、研究結果をまとめたものである。

表１　体育研究会での行動や思考から生成された概念と力量形成プロセス



また、力量形成プロセスの深まりについて、ストーリーラインとして概念との関係性を文章にまとめることを行った。概念と力量形成プロセスの関係性を文章化したストーリーラインを次のようにまとめた。

（文中‘　’は概念、【　】は力量形成プロセス）

小学校体育研究会は、‘半強制の参加’、‘体育への関心’など【様々な参加理由】をもつ教員で構成される。‘先輩教員との関わり’や‘教員スポーツへの参加’を通して、多くの教員は体育への関心を高めていき【学びの場の確立】をする。その過程で‘教員のやりがい’を得て‘主体性の出現’が起き、各個人で【参加意義の獲得】をする。‘研修会の企画’を任されるようになると、学んだことを他者に広げる経験を得て‘組織への参画’を意識するようになる。協議会への積極的な参加や、知識の高まりによって【授業改善に向けた自己省察】が行われ‘体育の授業提案の経験’の機会を求めるようになる。多くの先輩教員から話を聞いたり、他校の実践を取り入れたりするという経験を通して‘インフォーマルな人間関係の醸成’が進んでいき【人間関係の広がり】が起きる。研修会の企画や授業提案の経験、同僚からの励ましやねぎらいの言葉が‘自信の獲得’につながる。そして、上述したような体育の授業力向上に向けた個人の取り組みの集大成として授業実践の提案が行われ、【教科指導の追究】に向かう。授業実践の提案を経て、自身の‘授業に対する責任を感じる’ようになり、同僚や先輩教員と共に‘授業の工夫’について協議することに価値を見出す。部内や校内の‘若手教員の育成’に気を配るようになり、自身の指導技術や専門性を伝えるための場を設けるなど‘組織改善の取組’へ意識が向く。分科会の代表や部長としての役割を果たしながら【中堅教諭としての自覚】が生まれ、同様の立場の悩みを共有したり、共に学んだりする存在である同僚について‘同僚性の重要視’が進む。専門性の向上や他教科への関心などの思いから‘他の研究会への参加’を求めるようになり、自身の【学びの場の拡大】につながる。

４　研究の考察

小学校体育研究会で学ぶ教員の力量形成プロセスを分析すると、継続した系統だった学びがあると言える。一方で、力量形成プロセスは他者に決定されるものではない。時には希望していたとおりに授業発表者になれなかったり、授業提案が思うようにいかなかったりすることもある。つまり、固定化された系統性ではなく緩やかで人によって幅のある系統性のプロセスであると言える。また、力量形成プロセスは一方向だけに進むわけではなく、Off-JTへの参加や他の自主研究会への参加により、学びの拡大が先に起こることもある。専門性の高まりやネットワークの広がりにより、区市町村から都道府県へ、都道府県から国へと、学びの場を広げていくことも可能であると言える。力量形成プロセスは学びの場の拡大で終わりではなく、拡大した新たな学びの場で継続される。異動を経験した充実期の教員へのインタビューによると、他地区に異動した場合も小学校教育研究会での学びや活動を通して得られた教科の専門性などの力量や人的ネットワークは、継続して生かされていた。

本研究では、小学校体育研究会は教員の学習指導力の向上だけではなく、資質向上のための人材育成の場として学びの拡大につながる機能を有していることが明らかになった。しかし、対象者を小学校体育研究会に限定しているため、他の教科等研究会でも同様の結果になるとは限らない。同様の調査を行うことで、教科ごとの特色や力量形成プロセスに関する共通点や相違点を見出すことができると考える。

５　今後の展望

人間関係を広げながら教科指導の追究に向かっていく力量形成がなされていることは、東京都教育委員会(2016)「東京都公立学校の校長・副校長及び教員としての資質の向上に関する指標」で示されている「学校運営力・組織貢献力」、「教育課題に関する対応力」の向上と大きく関連していると言える。力量形成プロセスを参考に学び続ける教員像を実現するために、多くの研究会で活用されることが期待される。